



81.12.17 No.923 国鉄千葉動力車労働組合 千葉市要町二一八(動力車会館) (鉄電)二九三五(六)公衆(電話)七二七二〇七

# 「起訴の3名は暴力をふるっていない」(告訴人・検察側証人) 斉藤吉司が告白 の証言で 大あやての 検察官

## 公判才2回目にして、早くも破綻しはじめた 「6.12津田沼事件」のデッチあげ性

\*\*\*\*\*  
去る十二月十日、千葉地裁で開かれた「六・一二デッチ上げ津田沼事件」第二回公判において検察側証人として権力に守られて出廷した齋藤吉司が、検察側の思惑を裏切つて、「コウモリ傘で殴った者を見ていない」「起訴された三名は暴力をふるっていない」と正直に証言してしまったことで、「六・一二事件」がデッチ上げそのものであったことを完全に暴露した。  
\*\*\*\*\*

### 検察側をあやてさせた 告訴人・齋藤吉司の証言

検察権力は、動労「本部」革マル反動分子のタレコミ告訴を動労千葉つぶしの絶好のチャンスとして六名の仲間を不当逮捕し、三名を起訴したのであった。

しかし、裁判が開始され、検察側の起訴事実の裏付けを行うための告訴人・齋藤吉司のこの日の証言は、全く正当にも「見なかった」「起訴の三名は暴力をふるっていない」という正直な証言によって検察側起訴事実の土台が大きく崩れ去る決定的な証言であったのである。

だからこそ、検察側は、告訴人・齋藤吉司に対する尋問を延々三時間にわたってくりかしくりかえし行ない、何とかして齋藤自身の口から「暴行をはたらいた者の名前」をかたせようとしたが、ついに出来なかつたのである。しかも最後には、裁判長から「長時間にわたってくりかえして同じ尋問が行なわれている」として主尋問を途中で打ち切られる始末であったのである。こうして、異例な形で「六・一二デッチ上げ事件」公判が行なわれようとしているのである。

### 検察側証人・齋藤吉司を拍手で激励する 動労「本部」革マル反動分子

さらに、十二月十日の公判の中で、わが動労千葉を権力に告訴した張本人・齋藤吉司が「六・一二事件」のデッチ上げ性を自ら暴露する証言を

行なったのであったが、この日、彼らは、もう一つの点でこの間彼ら「本部」革マル反動分子の反動性・反労働者性を自ら暴露する極めてハレンチ極まりない行為を行なったのである。

わが動労千葉がこの日、早朝から告訴人・検察側証人・齋藤吉司弾劾のため千葉地裁闘争に決起したことを知り、権力にあらかじめ「お願い」して傍聴席を確保し、百三〇名弱の革マル分子をかき集めて、齋藤吉司を防衛しながら公判開始直前にやつと千葉地裁に到着した。

そしてなんと、彼らは、革マル弁護士・渡辺千古につきそわれて検察側証人として出廷する齋藤吉司を拍手で激励していたのである。

いまだかつて、鉄労や同盟組合の他に、しかも公労協傘下の組合で検察側証人として出廷する者を拍手で激励する労働組合があつたであろうか。このような反労働者の・反動的な行為は、わが動労千葉を権力に売り渡し、告訴し、国鉄当局に処分を要求し、スト破りを公然と行ない、合理化に協力する動労「本部」革マル反動分子にしてはじめてやれることなのだ。

われわれは、わが動労千葉破壊のための「本部」革マル反動分子・権力一体となつた「六・一二デッチ上げ事件」公判を逆手にとつて、この公判闘争を徹底的に闘うことを通して彼ら「本部」革マル分子の反動性を満天下に暴露し、彼らを動労から追放・一掃し、動労大改革をかちとろうてはな

## 全金本山労組 年末物資販売

今年の全金本山労組の年末物資販売は、例年にも増して全支部の多くの皆さんの御協力を得て多額の売り上げが得られました。全組合員の皆さんの多大な御協力に感謝致します。全金本山労組の闘う仲間達は、今日の多くの労働組合が資本と会社側に屈服し、右傾化の道をたどっている中で、本山資本からの首切りと合理化攻撃に屈することなく一貫して労働者の立場を守り、三里塚闘争を突破口に日帝・支配階級の軍事

## 全組合員の御協力に感謝します

大国化・改憲攻撃と対決し、闘い抜いています。今後共、われわれ 動労千葉は、全金本山労組の闘う仲間達との共闘を堅持し、右翼労働「統一」攻撃粉碎・三里塚二期着工阻止・国鉄三五万人体制粉碎にむかつて共に闘い抜こうではありませんか。

全金本山労組物資販売 動労千葉の売り上げ金額(二二ノ九現在) 132万2700円